The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	山形市方言における文末詞ズ
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2000, 2, p. 8-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23180
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

山形市方言における文末詞ズ

渋谷勝己

【キーワード】山形市方言、ズ、引用、情報の押し付け、訴えかけ

1. はじめに

山形市方言には、次のように、主に文末で用いられる不変化詞ズがある。

(1) 俺が行くズ

(2) 早く行けズ

これまでこのズ（ヅ（ー）と表記されることもある）は、

(3) オラヤンダヅー

(4) ホンナエヅー

といった例にもとづいて、「強意」を表し、婦人・少年に多く用いられると記述されることがあった（斎藤 1961、1982）。また国立国語研究所（1978:17、矢作春樹担当）も、「強意の助詞には『ハー』『ヅー』『シタ』などがあり、複雑なニュアンスをもっている」としている。しかし、矢作のいう「複雑なニュアンス」がそれ以上分析されることはなく、文法的な記述は課題として、これまで残されたままであった。

そこで本稿では、このズを取り上げて、その意味特徴を分析することを試みる。データは筆者（18 歳まで山形市に在住）の内省を中心とし、適宜、国立国語研究所（1978）を参照する。後者からのデータである場合、同書にしたがって全発話をカタカナで記し、ズはヅと表記する。例の最後の数字はそのページ、対訳も同書のものである。筆者の作例については、議論に関連する形式のみをカタカナで記し、他は理解の便を考えて共通語で記す。

なお、文末詞（あるいは文法事象一般）については、山形市を離れて二十二年になる筆者自身が内省できるものとそうでないものがある。渋谷（1999a）で記述したハや、本稿で取り上げるズは内省できるものであり、一方、今後記述を予定しているバやジェは内省しにくいものである。

(5) あの人行ったバハー

(6) あの人行ったジェハー

この、形式による内省可能度の違いがなぜあるのかということについては、使用頻度ということと関係があるように思われるが、今後、言語接触・言語変化の問題と関連させつつ、ほかの文末詞を記述していくなかで、継続して考察していく予定である。

2. 共起関係

2.1 他の文末詞との共起関係

まず、文末詞ズの、文中（文末詞の相互承接）における位置について確認しておこう。たとえば、次のような文末詞と共起して使われることがある。

(7) シタ ＋ ケ ＋ ベ ＋ ズ ＋ ネ ＋ ハ

ここで、ケは回想・報告（渋谷 1999b）、ベは推量、ネは伝達のムードを表すもので、ズはその中間に位置することがわかる。これらの文末詞のうち、ベまではカラ節などＣ類従属節（南 1974）に入るが、ズや、ズに後接するネやハは入らない。

2.2. 文タイプなど

次に、ズが使われる文タイプについては、以下のように制限がない。平叙文・(疑問詞・YES-NO）疑問文・命令文など、いずれにも後接する汎用的な文末詞である。

(8) 明日雨だズ（平叙文：叙述）

(9) いっしょに行くベズ（平叙文：勧誘）

(10) いつ言ったズ（疑問詞疑問文）

(11) 明日雨降るかズ（YES-NO 疑問文）

(12) 早く行けズ（命令文）

3. ズの基本的意味・用法

結論から先に述べれば、文末詞ズは、「命題内容や発話行為等を聞き手に押し付ける（インポーズする)」といった意味機能をプロトタイプ的に表すといえる。具体的には、次のような特徴づけが可能な、聞き手目当ての伝達的なムードを表す。

(a) 話し手の意見・考えはすでに確定している

(b) 話し手は、聞き手も（一度は）それを認識したはずだと思っている

(c) しかし実際はそう思っていない/しようとしない聞き手に、そう思わせる/させる（押し付ける・訴えかける）ことをもくろむ

このような特徴をもつズが付加した文は、その頻度が多いという意味で、典型的には「説得」といった機能を担うことが多く、したがって独り言のなかで使われることはない。また、聞き手が話し手の意向をなかなか受け入れようとしないといった状況のもとでは、「いらだち」といったニュアンスを語用論的に含むことがある。

ズのこのような意味特徴は、当該形式の起源が（＊）トイウ（＞＊チュー＞ズ）という引用の形式にある（とされる）こととかかわりがあろう。同じく引用形式と関連する共通語の「って」を分析した守時(1994)や堀口(1995)の、「って」に関する用法分類と対応させれば、当該発話以前にかわされた会話のなかの発話の内容、発話行為（形式ではない、(13)ではＡ１、Ｂ１）を、同じ話し手が同じ聞き手にたいして再度述べたてたり、行ったりする（(13)ではＡ２、

Ｂ２）際に使われる「って」のなかのひとつの用法に相当するものである。

(13) A1: あんた 早く宿題やりなさいよ

B1: うん

A2: 早くすませなさいって

B2: わかったって

共通語の「って」の他の用法、たとえば伝聞や、話し手自身のことばをメタ的に引用する場合には、山形市方言ではそれぞれド、テ（ユウ）などによってマークされ、ズが使われることはない。

(14) 太郎、今度、香港に行くんだ って/ド/＊ズ（行くんだそうだ）

(15) A: おまえ さっきなんて言ったの?

B: 「早く来い」 って/テ/*ズ

以下、ズの意味・用法を具体的に見てみよう。

まず、ズは、

(16) A: （電話で）そっちの天気はどう？

B: ＃うん、いい天気だズ

(17) ＃きのう映画見に行ったんだズ。そしたらね...

の例に見るように、情報を新規に持ち出す場合には用いられない（ただし§ 4.2)。

(18) A: 明日釣りにでも行こうよ

B: 明日雨だズ、さっきも言っただろう

のように、話し手がすでに言ったことを聞き手が忘れたり、納得していない場合に、再度（いらだちを含んで）伝える場合に用いられるのが普通である。

このことは、叙述以外の発話行為（あるいは文タイプ）についても当てはまり、

(19) A: おまえ、明日学校に行くんだろうね

B: 行くズ、さっきも言っただろう（意志）

(20) A: 困ったなあ

B: だから、さっきから言ってるだろう、相談に行くベズ（勧誘）

(21) A: この際行っておいたほうがいいよ

B: うーん、どうしようかな、迷うな

A: とにかく行けズ、絶対そのほうがいい（命令）

といった文は適格であるが、

(22) ＃よしっ！そんなら俺が行くズ

(23) ＊明日暇だったら、よかったら映画に行くベズ

(24) これきのうもらったんだ。＊よかったら食ってみろズ

といった、先行する発話のやりとりによって生じた（はずの）聞き手の認識を前提とはしない、会話の場で新たに述べられる意志・勧誘・命令等を表す文とは共起しない。

また疑問文と共起したズは、なかなか答えない聞き手に再度質問を行うといった場合（(25)(27)）のほか、相手の考え/主張に対して話し手が疑念を再表示する場合や（(26)）、反語的に聞き手を説得する場合（(28)）などにも用いられる。

(25) おまえ、学校にいつ行くんだズ。早く教えろズ。

(26) A: だからおまえがそう言ったんじゃないか

B: おまえ、さっきもそう言ったけど、そんなこと、いつ言った（ケ）ズ。いくら考えても思い出せないんだけど

(27) おまえ、あした学校に行くんだガズ。早く言えズ。

(28) A: 彼、手伝ってくれないかな

B: 無理だよ

A: だめかな

B: あいつがそんな仕事するかズ（するかよ＝しないよ）

ちなみにズは、(7)や(29)のように、渋谷(1999a)で記述した、「話し手の本意でないこと」を表すハとも共起する。

(29) A: きょうはゆっくりできるんだろう

B: いやー、そろそろ行くハー

A: いいじゃない、もう少しゆっくりしていったら

B: いやー、今日は行くズハー/ザー

この場合のズハー（ザー）は、BがAの誘いに反して「行く」ことを再度主張している点で、

(30) A: 今日も泊まっていったら。

B: 今日は帰るズ。さっきも言っただろう

といった場合のズと類似するが、その主張が本意でないということを述べている点で(30)とは異なる。(29)のズには、話し手の恐縮する気持ちは感じられても、いらだちといった含意はない。ハも長呼されるのがふつうである。

以上、ズの基本的な意味特徴をまとめた。ズを会話における話者交替のなかに位置づけてみれば、話し手の考えや意志などを述べる場合には隣接ペアの第一発話部分よりも第二発話部分に現れることが多く、逆に命令・疑問文などでは第一発話部分で使われることが多い。また会話の冒頭（トピックの新導入部）では使用されないはずの（§ 4.2 参照）形式であることがわかる。

4. 聞き手の考え・意向と対立しないズ

ところで、ズの用法は、上の一般化だけで網羅されているわけではない。ズのプロトタイプ（発話内容・発話行為の繰り返しをマークする用法）からはずれていく、その点では文法化がより進んでいる以下のようなズの例がまだ残されている。

(A) 聞き手の発話内容が話し手の考えにマッチした場合の、聞き手への訴えかけ（§ 4.1）

(B) 聞き手を話に引き込むズ（§ 4.2)

(C) 自分自身への訴えかけ（§ 4.3)

以上の項目はまだズの周辺的な用法の羅列の域を出ないものであるが、(A) (B) はいずれも、先の§３で述べたズの三つの意味特徴、

(a) 話し手の意見・考えはすでに確定している

(b) 話し手は、聞き手も（一度は）それを認識したはずだと思っている

(c) しかし実際はそう思っていない/しようとしない聞き手に、そう思わせる/させる（押し付ける・訴えかける）ことをもくろむ

のうち、(b) および/もしくは (c) の「実際はそう思っていない/しようとしない」聞き手という部分が後退して、聞き手への訴えかけ性が顕著になったものという点で共通する。また (C) は、(b) (c) の「聞き手」の部分が、「話し手」に変更されたものである。

4.1. 聞き手の発話内容が話し手の考えにマッチした場合の、聞き手への訴えかけ

まず、たとえば、知人に道で会ったときのあいさつとして交わされた、

(31) A: 今日はいい天気だね

B: ンダネ（そうだね）

といった応答を考えてみよう。ここでネは、両者が同じ情報をもっているという状況のなか、互いの情報を確認しあうという、共通語と同じ機能を果たしている。一方、両者が雨が降ることを期待しているというときになされた、

(32) A: 今日もまたカンカン照りだね

B: ンダズ（ネ）

といった応答では、Ｂは、「まさにそのことが自分が思っていたことだ」ということを聞き手に強く訴えかける機能を果たしている。しかしここには、納得しようとしない聞き手Ａを説得しようとするといった意図はない。この、聞き手への訴えかけということは、特に、ズがネと共起せず、単独で使われた場合に顕著で、その場合には、

(33) A: 今日もまたカンカン照りだね

B: ンダズ。これでは稲は育たないズ。どうするベズ

のように、不満を羅列することも可能である。

ここでは、ズの典型的な用法に見られた、

(a) 話し手の意見・考えはすでに確定している

(b) 話し手は、聞き手も（一度は）それを認識したはずだと思っている

(c) しかし実際はそう思っていない/しようとしない聞き手に、そう思わせる/させる（押し付ける・訴えかける）ことをもくろむ

の特徴のうち、(c) の、「しかし実際はそう思っていない/しようとしない聞き手」の部分が欠けている。とすれば、ズをもつ発話が聞き手を説得するものかどうかということはズの本質的

な意味特徴ではなく、語用論的に決まる意味だと考えることもできよう。その場合、ズにとって大事な特徴は、話し手の考えが確定しており、それを聞き手に訴えかけることだということになる。

4.2. 聞き手を話に引き込むズ

一方次のような例では、たがいにズ（ヅ）を用いて、両者が同じ意見を述べあっている。

(34) B: アドノ ショーガヅナテ ユタテハ モヅナ ツガネヅハ（笑）。オラエデ ツカネハ
（あとの正月なんて言ったって、餅などつかないな。俺家などつかないな）
A: ンダー ヤッパリ ンダヅ。エマナノ アドノ ショーガヅナテ ツカネハー
（そう、やっぱりそうだ。今など、あとの正月なんてつかないなあ：129）

ここでBは、新たな話題の導入部での第一発話部においてズ（ヅ）を用いている。このとき、聞き手Aが、ズを、§３でまとめたようなプロトタイプ的な意味で解釈した場合には、聞き手が知識をもっていること、あるいは納得していることを否定し、聞き手のポジティブなフェースをつぶす発話になるはずである。

(35) A: オゾン層はいまこわされているんだズ
B: 何度もうるさいな、そんなことは知っているズ

にもかかわらず(34)でズが第一発話部で用いられたのは、このようなズが、§ 4.1 で確認した「聞き手への訴えかけ性」ということだけを表すものとして、すでに抽象化しているからだと思われる。そもそもは、聞き手を話に引き込もうとするようなときに、「今話していることは聞き手が聞いても信用しにくい話であるから、最初から説得の様式を採って訴えかけるのだ」というように装って、発話の開始部からズをストラテジックに使ったものが、ひとつの用法として固定化したものであろう。この用法は特に、以下の例のように、（聞き手の知らない）自分の経験譚などを述べる際に、回想のケと共起して使われる場合に顕著である。自然会話のデータ（国立国語研究所 1978）に現れたズには、このような例が多い。

(36) ハエヅデ ジョーヅダテ ユナデ ホレ ホービ マエネン モラウケヅ
（それで上手だっていうので、ほら、褒美を毎年もらうんだった：60）

(37) ナニマヅドガテ チェット ン カワタ マヅドガテ ユナダケヅ
（何とか松とか言って、ちょっと、ん、変わった松だとかって言うんだった：107）

また、

(38) 太郎はテストが終わると、よく夜遊びするケズ。そして.....するケズ

のように、たたみかけていうこともある。そしてこのようなズ（ヅ）は、すでに話し手のなかで確定している事態についていうものである点、

(39) あー、そういえばむかし、太郎は夜遊びするケナー（＊するケズー）、授業もさぼるケナー.....

のような、その場で思い出された過去の事態がケナーで連鎖されるのと対立する。

なお、(ケ) ズに代えて (ケ) ヨを用いた場合には、聞き手への訴えかけ性といった意味特徴はなくなり、単なる新情報 (報告事項) の伝達となる。

(40) A: 太郎 イダケガ (いたか。ケは報告を表す)

B: うん、イダケヨ/*イダケズ

のような場合、ズでは答えられない。

また、ズがヨと共起することはない (§ 5 も参照)。

4.3. 自分自身への訴えかけ

最後に、ズのもつ訴えかけ性が、聞き手だけではなく、話し手自身にも向けられているように思われる例を確認しておこう。次のような例である。

(41) A: あんな小さい子が、よくここまで一人で来たズ、ほんとに

B: ンダズネー (そうだよねー)

(42) うまいぐあいに雨が降ってくれたズ、ほんとに (降ってくれたよ)

(43) あいつ、あんなとこによく行くズ、ほんとに (よく行くよ)

(44) あいつ、あんなことを上司にむかってよく言うズ、ほんとに (よく言うよ)

このズは、生起可能性の低い事態が現実に起こったということを、一方では認めつつも (したがってズが使用されるための条件(a)が満たされる)、一方では半信半疑でいる話し手自身(条件(b)の「聞き手」を「話し手」に変更して、あるいは「聞き手」に「話し手」を加えて適用)に認めさせる (訴えかける、条件(c)の「聞き手」を「話し手」に変更して、あるいは「聞き手」に「話し手」を加えて適用) という役割をもつものであろうか。(41) (42) は好ましい事態、(43) (44) は好ましくない事態について述べられたものである。

5. ズとネとヨ

§ 4.2 において、ズがヨと共起しないことを確認した。ズはむしろ、ヨと同一の文法カテゴリで機能的に対立することがあり、また一方では、ズはネと共起する。ここでは、こういった、ズ・ヨ・ネ三形式の分布や共起関係について、体系的に整理する。

5.1. ズとヨ

ズについて斎藤(1982)は、共通語の「よ」をその対訳としてあげている。

(45) ホンナエずー (そうでないよ)

ヨは、山形市方言でも聞き手に新たに情報などを伝えるときに使われるもので、ズとの対立が問題になるところであるが、次のような例で、その違いが顕著になる。

(46) A1: あしたちゃんと行けヨ

B : いやだよ

A2: ちゃんと行けズ

ここで、Ａ１の行ケヨとＡ２の行ケズを入れ替えることはできない。また、

(47) A: おまえ 今年 確か 40 ダズネ（＝40 だよね）

B1: ンダヨ

B2: ＃ンダズ

に見るように、新規の質問のなかでネと共起したズは使えるが（§ 5.2 参照)、それにたいする答えのなかでズを使うことはできないということもある。ちなみに(47) Aのズをヨに置き換えてヨネとすると、次項で述べるように共通語的な言い方になる。

5.2 ズネ

では、ネと共起したズ（＝ズネ）は、どのような機能をもっているのだろうか。

これは、聞き手に、話し手の情報が正しいものであることを確認するという機能をもつものである。聞き手の考えを変えようとするものではないという点では§４で検討したズの用法と共通する。このズネは、共通語の「よね」にほぼ相当するといってよい。

(48) A: おまえ、そのとき確かそう言った（ケ）ズネ（＝言ったよね）

B: ンダケガ（＝そうだったっけ）

(49) A: この仕事は、確かみんなでするんだズネ（＝するんだよね）

B: ンダ（そうだ）

(50) A: おまえ 今年 確か 40 ダズネ（＝40 だよね）

B: ンネ（そうではない）

これらの例からズを省いてネだけを用いた文は、共通語的な表現である。またヨネも、若年層での使用が増えているようには思われるが、§ 5.1 で述べたように、まだ共通語的にひびくところがある。

また、ズネには、話し手の観察を聞き手に再提示する用法があり、

(51) A: しかし 太郎の車 って いいズネ（いいよね）

B: ンダ（ズ）ネ

(52) おまえ、最近太ったズネ（太ったよね）

B: ンダガ（そうか）

のように使われる。これは、前に見出した事態を、聞き手にすでに伝えたかどうかとは関係なく、話し手自身が再確認しつつ（ズの使用条件(a)）、聞き手の同意を得ようとするものである。発話の時点で新しく見出した事態などについては使えない。

(53) ＊へーっ、おまえ、太ったズネ/よね

この点でも、共通語の「よね」の用法に類似する。

ズネについてはいずれの場合にも、（以前にも取り上げられた）話題の（再）導入部分として、第一発話部で用いることができ、聞き手の肯定的な答えを予想している。

以上、山形市方言のズとヨについて述べたことをまとめてみると、次のようになる。

(A) 単独で使われたズとヨは、[訴えかけ] という特徴の有（ズ）無（ヨ）によって意味・機能的に対立する

(B) ズとヨは共起しない ((A)からの必然的な帰結)

(C) しかし、ネが後接した環境では、ズとヨは意味・機能的には対立しない。方言と共通語というスタイル面での対立である

ただし、§ 4.3 で述べた「自分自身への訴えかけ」の場合には、単独で使われてはいるが、ヨと置き換えることはできない。置き換えた場合には共通語の言い方となる。このような用法では、[訴えかけ] ということについて無標の方言形式ヨがそもそも使えないということなのかもしれない。この、無標のヨの使用制約は、舩木(2000) が、山口方言のッチャとの緊密な結び付きを指摘する「告白」のノダの場合にも同様に適用される。

(54) おれ 実はめかけの子なんだズ/＊ヨ/よ （告白、野田 1997)

(55) A: あいつ来ないなあ

B: この時間まで来ないってことは、たぶん時間ないんだ＊ズ/？ヨ/よ/ベナ

「告白」といった行為には、[訴えかけ] といった意味特徴が必然的に伴うものであろう。

6. まとめ

以上本稿では、山形市方言の文末詞ズの記述を試みた。まとめれば次のようになる。

(A) 叙述文では、文法カテゴリの連鎖のなかで、判断のモダリティと伝達のモダリティの間の位置を占める。

(B) 話し手の考えや信念を聞き手に強く訴えかける（押し付ける・インポーズする）場合に使われる。具体的には、以下のような用法が見出せる。

(B-1) 話し手の考えや意向が聞き手のそれと対立し、後者を変えることをもくろむ場合。使用頻度の多さという点で典型。(§３)

(B-2) 聞き手の考え・意向と対立しないズ（§４）

(B-2-1) 聞き手の発話内容が話し手の考えにマッチした場合の、聞き手への訴えかけ (§ 4.1)

(B-2-2) 聞き手を話に引き込むズ（§ 4.2)

(B-2-3) 自分自身への訴えかけ（§ 4.3)

(C) ズとヨの対立は、(B-2-3)の「自分自身への訴えかけ」など、「訴えかけ」が顕著な場合を除き、単独で使用された場合には意味・機能的なものであるが、ネを後接させた場合にはスタイル面でのものとなる。

なお、本稿では取り上げなかったが、ズにはまた、(56)のようにダと共起して使われるケースがある。

(56) a しょうがないから行グッダズー/行ッタッダズー

b ＊間違いなく 行グッダズー/行ッタッダズー

(57) a しょうがないから 行グズ/＊行ッタズー

b 間違いなく 行グズ/ 行ッタズ

この場合、(57a)の示すように、ダを用いなければ非文になるという特徴があるのだが、これはズだけの問題ではないので、ここではこれ以上触れることはしない。また、山形市方言のズは、トイウだけではなくノダ（ノニ）をも含めた全体に対応するかに見えることもあり、

(58) おれが行くんだっちゅうの/ンダズ

(59) 太郎を呼べっちゅうねん（大阪方言）/呼ベズ

さらに追究する必要があるのだが、すべて今後の課題とする。

* この研究は、平成11年度文部省科学研究費（基盤研究(B)(2)、研究課題番号10410097）「文法体系のバリエーションに関する対照方言学的研究」（代表者、大西拓一郎）によるものである。

【参考文献】

国立国語研究所（1978）『方言談話資料(1) －山形・群馬・長野－』 秀英出版

斎藤義七郎（1961）「山形・宮城」『方言学講座 第二巻 東部方言』 東京堂

――― （1982）「山形県の方言」『講座方言学4 北海道・東北地方の方言』 国書刊行会

渋谷勝己（1999a）「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1

――― （1999b）「文末詞 『ケ』－三つの体系における対照研究－」『近代語研究 第十集』武蔵野書院

野田春美（1997）『『の(だ)』の機能』 くろしお出版

舩木礼子（2000）「山口方言の文末詞チャ」（本誌所収）

堀口純子（1995）「会話における引用の『～ッテ』による終結について」『日本語教育』85

南不二男（1974）『現代日本語の構造』 大修館書店

守時なぎさ（1994）「話し言葉における文末表現『ッテ』について」『筑波応用言語学研究』1

しぶや　かつみ（大阪大学大学院文学研究科）

sbj@let.osaka-u.ac.jp